

異年齢交流から見えてくるもの ～3歳未満児と3歳以上児～

富山保育所（若竹保育園）

執筆担当：庵 幸世

キーワード：縦割り保育 交流 保育の変化 職員間の意識

I. はじめに

富山保育所では十数年ほど前まで0歳～5歳の異なる年齢の子ども達が、時間を区切ったり、環境を設定したりなどの保育士による配慮をせずに、家庭にいるようなごく自然な形で触れ合う姿が見られていたように思う。しかし、3歳未満児クラスの拡大、職員・パートの増員、安全面の確保などの時代の変化もあり、今ではその風景を見られることが減少し、またそれに伴い、子ども達の他児と関わる力（同じクラスや同じ年齢という枠を超えた他のクラス・小さい子に対する関心）が低くなってしまったのではないかと寂しさを感じる事が増えてきた。

そこで当保育所の保育方針であり、大切にしてきた特長の一つである《家庭的な雰囲気》をより高めると共に異年齢交流をする中で見られるであろう、お互いの変化・影響、また保育者にとっては保育の“喜び”“楽しさ”を求めて、どのように異年齢交流を取り込んでいけば良いのか、探っていきたいと考えた。

II. 研究の目的

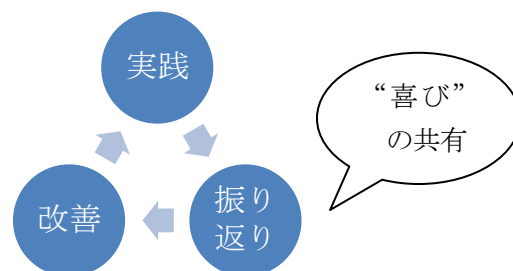
- ・子どもと保育者がともに楽しみ合えるような異年齢交流のあり方を探る。
- ・保育者の異年齢交流への意識を高めると共に職員間で一人ひとりの子どもの姿を見つめる事で“保育の楽しさ”を共有し、次への意欲・保育の質の向上へと繋げる。

III. 研究の方法

- ・異年齢交流をしない・できない理由や環境、また職員の異年齢交流への意識や思いなどの現状把握→分析→改善案→意思統一



- ・異年齢交流の実践→振り返り→検討→実践



- ・日々の保育、子どもの姿を通してより良い交流のあり方について職員間で話し合い、考察する。

IV. 事例と考察

(1) 富山保育所の実態・職員構成

定員 90名 H25年度 102名
H26年度 99名

・3歳以上児(縦割り保育)

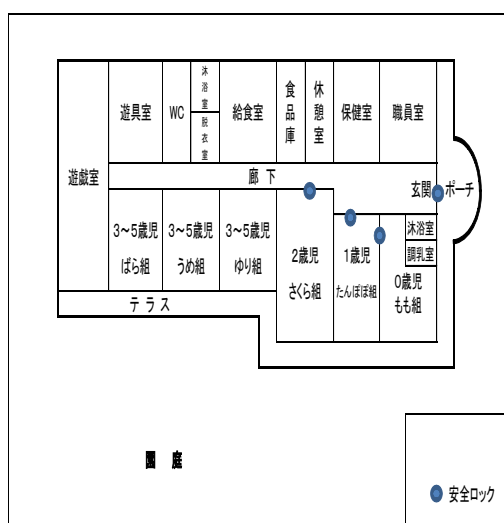
	ばら組	うめ組	ゆり組	合計
3歳児	7名	7名	8名	22名
4歳児	7名	6名	6名	19名
5歳児	7名	7名	8名	22名
合計	21名	20名	22名	63名
正規職員	10 年目	14 年目	12 年目	

※いずれも一人担任

・ 3歳未満児(年齢別保育)

もも組	たんぽぽ組	さくら組
0歳児	1歳児	2歳児
6名	15名	15名
正規職員 2人	正規職員 2人	正規職員 2人
・ 20年目 ・ 12年目	・ 17年目 ・ 1年目 非正規1人	・ 16年目 ・ 1年目 非正規1人

・ 園舎見取り図



園 舎

● 安全ロック

(2) 保育者の意識

(H25年度 職員アンケート調査より)

Q1. 異年齢交流をできない理由や環境は何だと考えるか?

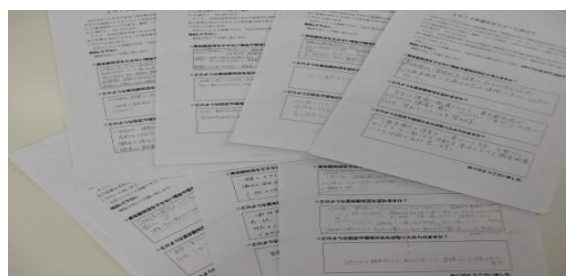
- ◎ 3歳未満児と3歳以上児の職員間の連携が乏しいため (コミュニケーション不足)
- ◎ 時間的、管理的な保育になりつつある
- ◎ 安全面を考え怪我をさせてはいけないと極端に気を使う、保護者からのクレームに怯えるなど、気持ちのゆとりがない。また、保育の喜びや新しい活動に対するの努力が報われず、どんどん億劫になっているため
- ◎ 職員同士の異年齢交流への意識の薄れ
- ◎ 子の幼稚化……体つき・学ぶ力・考える力・年齢に合った友だちとの関わり方や経験不足など

Q2. どのような異年齢交流を望むか?

- ◎ 安全に配慮しながら自然な流れの中で異年齢交流を取り入れていきたい
- ◎ 3歳未満児と3歳以上児の職員間の連携をより取る事で気軽な感じで遊びに行き来できる交流
- ◎ 少しずつ異年齢の子どもに関わり、寄り添える雰囲気から始めていきたい

Q3. どのような設定や環境があれば取り入れられるか?

- ◎ 3歳未満児の保育を一斉ばかりせず、分散したやり方⇒ 少人数ごとに責任のおける職員配置が必要
- ◎ 自然な形で職員同士も声を掛け合い、連携していく必要性
- ◎ 職員一人ひとりの意識と共通の思い



【考察】

保育経験が浅い保育士は異年齢交流に対するイメージがつきづらく、特に3歳以上児と3歳未満児が交わる事で安全面における不安が大きい。また、職員の勤務・雇用形態が多様になり(時差出勤・アルバイト、派遣など)意思疎通が難しい場面も増えてきて、子どもより保育者の状況に合わせた制限しがちな保育にもなっている。

また年度によって、3歳未満児担当職員・3歳以上児担当職員など立場も変わってくるので、そこもしっかりと認識し、そして何より子どもたちが負担を感じないように交流を少しずつ取り入れていける環境や連携を考える事が実践に結びついていくと考える。

(3) 取り入れ・改善案

『きっかけづくり』として環境を設定し、その中での変化を見ていくところから始める。

①おやつ・給食を一緒に食べる

- ・1, 2歳児クラス←3歳以上児が行く

(2人程、希望や人を考慮して)

例・・・お菓子の袋を開けてあげる、
食べ方の見本など

- ・3歳以上児クラス←2歳児が行く

(受け入れクラス担任と相談し、人数や保育士の補助なども決める)

②3歳以上児クラスと一緒に活動

主に2歳児(2~3人程から)

例・・・各保育室での自由遊びやお集まり

(4) 事例

◎エピソード1 H25. 12月

《不安がいっぱい》

(背景)

3歳以上児と3歳未満児クラスとは、外遊びの際に園庭で一緒になる時や雨天時に3歳以上児が遊戯室にて自由遊びをしている時に混ぜてもらう程度である。

(エピソード)

『お兄ちゃん達のお部屋に行きたい人〜』と2歳児クラスのお友だちに声をかけてみると、反応ナシ。月齢の高い子から個別に聞いてみると次々に首を振った。そこで、

『Tちゃん(←兄の名前)のお部屋、行ってこようか?』

『Yちゃん(←従姉の名前)のところ、行ってくる?』と、具体的に名前を出して誘い、行く子が決まった。

(Sちゃん:男児) (Kくん:男児)

3歳以上児クラスでお兄ちゃん、お姉ちゃん達と一緒にごはんを食べたり、片づけを教えてもらったり、はじめてするパズルや玩具を自分で選んでは持ってきて、嬉しそうにする姿が見られた。

お昼寝の時間になり『ただいまー!!』と、元気に保育室に戻った。そして寝付くまでの間、一緒に行った保育士を中心に以上児クラスでの様子などを話した。

お昼寝から目覚め、おやつ準備の際に再度、声をかけてみる。

『おやつもお兄ちゃん達のお部屋で食べてもいいってー。どうする?行きたい人いる?』

『Sちゃん、行くー!』

『Aちゃんも行きたい〜』

午前には反応が無かった子や、首を振った子が手を挙げていた。

(考察)

2歳児の子ども達からすれば急に、3歳以上児クラスに行こうと誘われても想像がつかず、行ってみたい気持ちよりも不安の方が勝る。しかし、行ってみれば普段と違う玩具や好奇心を駆きたてられる環境があり、年上の子どもたちに優しく教えてもらい、自分もいつもよりお兄ちゃん・お姉ちゃん気分を味わうことができる。そして、この楽しさを経験した子が満足そうな表情をし、具体的に保育士と会話を楽しんでいた。これもまた、不安を感じていた子どもの心を和らげる一つの方法なのだと感じた。

色々な場面・時間で楽しいと感じられる経験こそ、この交流の基本的な要素である。そして、何度も繰り返す事やたっぷり時間をかける事で、子ども達の新しい表情が見られることに保育士も喜びや楽しみが増えてきている。



◎エピソード2 H26. 1月

《どうしていいかわからない》

5歳年長児T君（3人兄弟の次男）のクラス（うめぐみ）に弟の2歳児（さくらぐみ）Sちゃんが遊びに来た。初めてのことである。

（エピソード）

保：「一緒に給食を食べたり、遊んだりしてきたんだけど、いい？」

兄のクラスに行き、みんなに向けて聞いてみると「いいよー」「どこ座る？」

「T君、Sちゃん来たよ～」と、次々に笑顔で周りのお友だちとおしゃべりする3歳以上児さん。

T：「はいはい...」

半分嬉しいような、半分は周りの声に参ったという表情だったが、横に来てくれる。

保：「どうやってするか分からない事がいっぱいあると思うから、教えてあげてくれる？」

T：「うん。分かった！」

自信ありげに返事し、何だか得意気な表情を見せた。椅子を持ってきて座り、配膳時には会話を楽しみ、いただきます。穏やかに給食を食べる二人だったが、食事が進むにつれてSちゃんのスプーンや食べ物が落ちてしまう。困った表情のSちゃん。T君も動けずただ見ている。

保：「どうしたの？」

状況は分かっていたが、保育士が声をかける。

T：「・・・落ちた」

その後も動きがない。

保：「どうすればいいか教えてあげて。落ちたらどうしてる？」

M：「新しいのと交換して・・・」

と、隣に座っていたMちゃん（年長女兒）がすかさず、手順を保育士に教えてくれる。それも耳に入らない様子で茫然と、身動きをとれずにいた。

保：「じゃあ代わりにMちゃん、教えてあげてくれる？」

と言うと、手際良くSちゃんの手を引いて、丁寧に教えてくれる姿があった。その姿を見ながら保育士が

保：「T君どうしたん？」

と声をかけると

T：（どう教えてあげれば良いか）

「分からんだ」と答えた。

（考察）

初めて弟と共に過ごす中で、普段は何てことのない出来事が周りから注目され、それによって余計な緊張が生まれ、招いたエピソードだったように感じた。まだまだ交流が珍しく、興味を引き立ててしまう状態、関心が高まる環境。交流を重ねることで、お互いに対応にも慣れてくるのではないかと予想される。子ども達同士の自然なやりとりが当たり前に見られるようにこれからも進めていきたい。



◎エピソード3 H26. 6月

《小さい子のお世話》

（背景）

園庭と遊戯室は全園児の共有の遊びのスペースであるが、様子を見ながら時間差をつけて出てみたり、外から室内に切り替えたりして、子ども達の安全を確保している現状である。

（エピソード）

園庭に一番乗りで現れ“ちょこちょこ歩き”ながら、それぞれに散策をしたり、目当ての遊具の方に一目散だったりの0歳児クラス。

（ももぐみ）

その姿を見つけたゆり組（3～5歳 縦割りクラス）の子ども達は次々に窓側に近づき『〇〇ちゃんだ！ おーい、〇〇ちゃ〜ん！』『△△ちゃんもいるよ〜 かわいい〜！！』と、今すぐにでも側に行きたい様子。担任保育士はその姿を見て、外遊びに行く前に子ども達の動きを止め、子ども達と確認を行った。

『外遊びに行ってもいいけど、気をつける事はなんですか？』いつもと違った担任保育士の質問に子ども達は少し戸惑い、隣同士コソコソと相談しあう姿も見られる。そしてその中で、年中女児が『小さい子がいる…？』と、言う『小さい子にぶつくと危ない！』

『一緒に遊んであげる！』『優しくする！』など次々と自分達の思いがでてくる子ども達。『そうだねー、もも組さんが遊んでいるから気をつけてあげないとねー。宜しくね！！』と伝え、外遊びに出た。

外では、手押し車に乗せ押してあげたり、手をつないで散歩の誘導をしたりと、関わり合う子はどの子も笑顔で喜んでいる。満足気でどこか誇らしげでもあった。ゆり組の中では弟的存在の3歳児男児K君もこの時ばかりは『僕も押してあげたい！！』とお兄さん顔を見せた。

（振り返りより）

この日のゆり組の子ども達の姿に、もも組担任保育士より『何か子ども達に話してから外に出て来たの？』と、話す機会がもたれた。ゆり組担任が経緯を伝えると、『やっぱり！！言葉がけ一つ、やりとりがあるだけでいつもと全然違って、一緒に遊びやすかったよ！！』ゆり組担任としては、ほんのちょっとの子どもへの働きかけが変化を生み、双方の子ども達と保育士にとってより楽しい時間となった事が分かり、新たな喜びとなった。

（考察）

3歳以上児の子ども達にとっても赤ちゃん（0歳児）というのは特別な存在である。本

能的に“守ってあげたい”と意識が働くのかそれを感じやすい“見た目”があるのか無条件に“優しくしてあげたい”と関わろうとする。子ども達なりに“ケガさせないように”や“喜ばせてあげたい”と様々に考えて関わる事が、その子ども自身の大きな心の成長と繋がることに保育士は喜びを感じる。



◎エピソード4 H26. 12月 《行ってもいい？》

（背景）

2歳児さくら組との部分的交流（おやつ、給食、園庭など）が少しずつ繰り返される“〇〇ちゃんは〇〇ちゃんの妹”

“△△くんは△△くんのお兄ちゃん”などの認識がなされるようになり、園舎の内外で会った時も双方が手を振り合うなどの姿が多く見られるようになってきている。

(エピソード)

5歳年長児Kちゃん(女児)は、みんなが登所して、身支度を整えてそれぞれにブロックや折り紙など自由に好きな遊びをしているお部屋を後に2歳児クラス(さくらぐみ)の前に行き、立ち止った。しばらくの間、お部屋の中を見ている感じがしたので、不思議に思ったさくら組担任保育士が『どうしたの?』と声をかけると『さくら組さんに入っていますか?』と答えた。

さくら組に入るとぐりと見渡して、おままごとコーナーに行き、一緒に遊び始めた。突然に現れたお姉ちゃんに2歳児の子ども達も少し呆気にとられたものの、その後は嬉しそうに『お姉ちゃん!!』と喜び、側に行きおままごとを楽しんだ。

(考察)

いつもは同年齢の女の子達で遊ぶことが多く、その中でもやや控えめでお友だちのリードに合わせて遊んでいるKちゃん。『行きたかったん!!』と、その後に保育士や母親に話した素直な思いが交流を続けている事で、行動に表しやすくなったのかもしれない。家庭では、ほぼ一人っ子状態で『お姉ちゃん!!』と慕われ、頼られる状況もどこか嬉しく、同年齢のお友だちと遊ぶときは違う心地良さを感じているように見える。このエピソードでは“居場所の広がり”を強く感じた。Kちゃんにとってはこの交流を重ねるうちに“小さい子”との関わりが日常とは違った[心の休まる場]の一つにもなってきたのかもしれないと考えた。

◎エピソード5

H27. 1月

《一緒に遊ぶって?》

(背景)

幾つもの交流を重ねていくうちに、その時々の子どもの姿から発見や驚き、気づきなどを保育士間で共有することが増えてきた。その中で3歳以上児担任が揃って“横のつな

がりの薄さ”に疑問、違和感を感じたことから次なる展開を求めて、『他のクラスに遊びに行きやすい方法を子ども達にしっかり提示することで今よりもっと自主的に、積極的に交流がされるのではないか?』と安全面を考慮した、方法を提示することにした。



- ・自分のクラスの先生に行く事を伝える
「〇〇ぐみへ行ってきます」
- ・行ったクラスの先生に聞きましょう
「入ってもいいですか?」

(エピソード)

3歳以上児が一同に集まった機会を利用して“異年齢交流について”子ども達と話す時間を設けた。その中で『お隣のクラスで遊ぶのってどう?』との問いに『ダメ!!』と、答える子もいて、保育士は驚いた。

(考察)

確かに3歳以上児は、園庭や遊戯室では一緒に遊び、早朝や長時間保育時、年齢別保育時にはその担当のクラスに行き行って過ごすのだが、日中の自由遊び時などに横のクラスの中にまでは、遊びが継続しない不思議な光景が多々あったように見えた。3歳未満児との交流を主に取り組んできたが、子ども達の中には3歳以上児、横のクラスの壁があったのだと改めて気付かされた。



(5) エピソードから見えてきたもの

〈異年齢交流に大切なこと〉

***交流する双方が楽しさを味わうこと**

新たな出会いの場でもある異年齢交流でこそ、お互いに楽しさをたっぷり味わい『また次も!!』と、感じあえることが重要!!

保育者は子どもの新たな楽しみや興味に共感し、より発展するような関わり、配慮が大切。

***保育者同士の連携や振り返りを大切に**

安全確保はもちろん、振り返りを行うことで違う立場からの気づきや保育の喜びを共有できる。また、今後の成長への見通し・保育のあり方に繋がっていく。

***保育所全体で子どもを受け入れる**

異年齢交流の方法を職員全体で検討し、共通理解を図ることで子どもの思いを同じ関わりで受け入れることができる。

***子どもが取り組みやすい方法を伝える**

分かりやすく提示し進めていくことが、不安に感じてしまう子や経験の浅い保育士やパート保育士などにも有効である。



V. まとめ

今回、テーマを考えた時に取り戻したいと感じた“異年齢交流”だが、こうして取り組むことにより改めて保育を見つめ直し、職員間で話し合い、実践を繰り返す中で見えてくる一人ひとりの子ども達の姿に、また職員間で話し合う、という基本的だが原点の大切さを幾度も感じた。

“保育の喜び”＝子どもの育ちゆく姿とそれを保護者や職員など、共に喜び合える事。

“異年齢交流”は子どもの心をより豊かに培うであろう活動の一つ。

子どもの頃に心に感じた温もりは、その子にとって、貴重な経験でこの先“人との関わり”の中で活かされると願っている。

まだまだ子どもも保育士も試行錯誤しながら、進めている交流だが、これが新たな土台となり、保育所全体がクラスや年齢の枠を超えて、子ども達も保育士も関わり合い、更に交流を積み重ねていきたい。

【参考文献】

- ・ 鯨岡 峻／鯨岡 和子著
『保育のためのエピソード記述入門』
ミネルヴァ書房 (2007)
- ・ 倉橋 惣三
『育ての心(上)』フレーベル館 (2008)

【参考資料】

- ・ 保育士会だより 第263号